

研究論文

コロナ禍におけるオンライン・ゼミナールの可能性

—オンラインのゼミ談話に見るコミュニケーション活動の豊かさ—

石黒 圭 (国立国語研究所)

本論文は、対面コミュニケーションに比べ、話し合いへの参加者の積極的関与が失われ、参加者間の社交が困難になりやすいとされるオンライン・コミュニケーションについて、大学院のオンラインゼミの談話データを用いて、豊かなコミュニケーション活動が行われていることを質的な分析によって明らかにしたものである。参加者の積極的関与については、参加者同士の協力によって話者交替が積極的に行われ、沈黙による気まずさが回避される多様な方略が用いられ、参加者の話し合いへの積極的関与が失われているわけではなく、別の形で維持されていることがわかった。また、参加者間の社交については、オンライン会議ツールで共有されるビデオや音声に積極的に言及することで社交的な発話を行い、接続トラブルや研究上の困難を参加者間で協力しながら解決することで、信頼関係を醸成する姿が明らかになった。

キーワード： オンライン・コミュニケーション、対面コミュニケーション、グループ・ディスカッション、談話分析、Web会議システム

Online Seminar Activities in the COVID-19 Pandemic: Discourse Analysis of Online Classroom Discussion

Kei ISHIGURO (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

The purpose of this paper is to show that online communication is as rich in communicative activities as face-to-face communication, by analyzing classroom discussion in an online graduate seminar. It was found that in the online seminar participants engaged in highly interactive communication activities by actively taking turns in cooperation with each other and using various strategies to avoid the awkwardness of silence. It became clear that participants built up mutual understanding and trust by actively referring to the video and audio shared through video conferencing software and collaborating with each other to solve connection problems and research difficulties.

Keywords: online communication, face-to-face communication, group discussion, discourse analysis, web conferencing service

1. はじめに

1.1 コロナ禍でのコミュニケーション

新型コロナウイルス感染症の急速な感染拡大により、私たちのコミュニケーションのあり方は大きく変わったという前提で多くの人は語り始める。し

かし、ほんとうに大きく変わったのだろうか。私たちは、感染拡大のなか、必要な相手と必要なコミュニケーションをとりつづけていたのではないか。そう考えるのは、オンライン・コミュニケーションを支えるインフラがすでに整っており、そのインフラを活用すればコロナ禍にあっても対面に近い状況で

コミュニケーションを取ることが可能な状況があったからである(加納, 2020; 松河ほか, 2021等)。これが20世紀的状況とは決定的に違う点である。

オンライン・コミュニケーションを支えるインフラとは、パソコン、スマホ、タブレットといった情報端末、屋内のWi-Fi中継機や屋外の携帯基地局といった無線LAN、第5世代移動通信システム(5G)等の高速・大容量の無線通信システムの三つを指す。この三つのインフラ整備により、空間的にコミュニケーションが遮断されるはずであったコロナ禍の状況にあっても、これまでと同じように仕事が継続することが可能になった。この点は過小評価すべきではないだろう。もともとメールというテキストによるやりとりは普及しており、それにくわえ、Zoom, Google Meet, Microsoft Teamsといったオンライン会議ツールが定着したことで、対面と同等のコミュニケーションが可能になった。それによって不要な移動時間もなくなり、在宅ワーク・在宅学習が可能になったことで効率化が図られたという点で考えるならば、コロナ禍の負の影響を最小限で食い止めることができたとも言える。

1.2 コミュニケーション環境の二重性

しかし、オンライン・コミュニケーションは、対面コミュニケーションとどこか違うと私たちは考えたい。その理由はどこにあるのだろうか。そのもっとも大きな理由は、コミュニケーション環境の二重性にあるのではないかと(石黒, 2020)。コミュニケーション環境の二重性とは、オンライン・コミュニケーションが行われている仮想空間と、私たちが存在している現実空間の二重性のことである。

対面会議の場合、会議室の窓から突然スズメバチが入ってきたとしたら、会議どころではなくなるだろう。会議室は共有されている現実空間であるため、議事進行には、まずはスズメバチを会議室から追いだし、静謐な環境を取り戻す必要がある。しかし、オンライン会議では、一参加者の部屋にスズメバチが迷いこんだとしても、司会者や説明者の部屋が無事であれば、会議は何事もなかったように進むだろう。スズメバチが飛び交う現実空間と、オンライン会議が行われる仮想空間が分離しているからで

ある。

もちろん、コミュニケーション環境の二重性は21世紀になって初めて生まれたものではない。遠隔地をつなぐ電話も、メールや手紙も、同じようにコミュニケーション環境の二重性は生じている。しかし、こうしたメディアは、現代のオンライン・コミュニケーションとは質的に異なる。電話は音声だけの同期であり、動画の同期は起きていないし、書き言葉であるメールや手紙では、そもそも同期は起きておらず、発信者の発信時間と受信者の受信時間にはずれが生じているからである。

コミュニケーション環境の二重性を作り出すには、コミュニケーションの媒体となるツールやネットワークの技術革新が必要となる。その技術が高度化すればするほど、文字⇒音声⇒動画とマルチモーダルなものへと進化し、同期のスピードは速くなる。それによって、バーチャルなコミュニケーションがリアルなコミュニケーションへと近づいていく。しかし、どんなに近づいても完全にリアルなコミュニケーションにはならず、とくにそうしたツールやネットワークに慣れない段階では、ある種の違和感が生じてしまうのが実態に近いように思われる。

1.3 言語実態に即したコミュニケーション研究

コロナ禍にあつて、対面コミュニケーションの機会が奪われたことで、コミュニケーションのあり方が大きく変わった。私たちのコミュニケーションのなかから身体性と温もりが失われ、オンライン授業を受講する学生たちも受動的な姿勢になりがちで、退屈やコミュニケーションの難しさを感じる声も聞かれる(岡田, 2021; 拝田ほか, 2021等)。しかし、そうした見方が、ほんとうに私たちの言語コミュニケーションの実態と合っているのか、言語事実をもとに検証してみる必要が言語研究者にはある¹⁾。

本論文は、コロナ感染の拡大が起り、オンライン授業への移行が手探りで進められた2020年度初頭に行われたZoomによる大学院ゼミを文字化・分析した結果を報告するものである。本論文が公開されるころには、オンライン授業が継続されていたとしてもかなり安定的に運営されているだろうし、授業に出席する学生も、授業を担当する教員も、オン

ライン授業導入初期の試行錯誤や戸惑いは忘れ去っているかもしれない。しかし、コロナ禍が急速に押し進めたコミュニケーションのオンライン化によって、人間のコミュニケーションのどのような側面が変わり、どのような側面が変わらなかったのか、当時の実態を言語事実即して記録しておくことは、対面コミュニケーションの意義が問い直される現在においても、そして、コミュニケーションの形がさらに変容することが予想される未来においても、一定の意義が存すると考える。

1.4 本論文の研究課題

私たちはオンライン・コミュニケーションに一定の評価を下しつつも、対面コミュニケーションとは異なる点にたいしてネガティブな印象を抱きがちである。しかし、そうしたネガティブな印象がはたしてコミュニケーションの言語実態に即したものであるのか。本論文では、そのことを明らかにするために、次のような研究課題を設定した。

研究課題①：オンライン・コミュニケーションでは、話し合いにおける参加者の積極的関与が失われやすいのか。

オンライン・コミュニケーションでは、ターンを取るタイミングがわかりにくいため話者交替が少なく、また、ターンを取ると発言者としての権限が重くなるため参加者が発言を控えがちであるとされる。その結果、一人の発言者がとうとうと長く話したり、沈黙が続いたりすることで、話し合いにおける参加者の積極的関与が失われやすいことが予想される。しかし、はたしてそれが事実なのか、3.で実例を挙げつつ検討する。

研究課題②：オンライン・コミュニケーションでは、話し合いにおける参加者間の社交は起こりにくいのか。

オンライン・コミュニケーションでは、現実空間を共有していないため話し合いのテーマ以外に話が広がりにくく、雑談等による参加者間の社交が起こ

りにくいとされる。その結果、話し合いが効率的に進む半面、話し合いが単調であり、やりとりが冷たく事務的になりやすいことが予想される。しかし、はたしてそれが事実なのか、4.で実例を挙げつつ検討する。この二つの研究課題をとおして、オンライン・コミュニケーションの言語事実に基づく実態を明らかにすることを目指したい。

2. 研究の資料と方法

本論文で扱う談話は、筆者自身が担当している一橋大学大学院言語社会研究科の大学院ゼミナールで収録したものである。大学院ゼミナールの談話を扱った研究は嶺川(2001)や徐(2021)をはじめいくつも存在するが、オンライン・ゼミナールの談話を扱った研究は管見の限りほとんどないように思われる。当該ゼミは、2019年度は対面ゼミとして実施していたが、コロナ禍の影響で2020年4月からZoomのブレイクアウトルームを用いたオンラインゼミに移行した。

ゼミ出席者は多少の出入りがあったが、授業開始当初は27名が参加していた。一橋大学大学院言語社会研究科の修士課程・博士課程の大学院生が中心であるが、大学院博士課程を修了して大学教員になっているOB・OG、他大学の大学院生なども参加している。なお、発話者を記号化するさい、日本人の大学院生には「J」で、留学生の大学院生には「L」で、大学教員になっているOB・OGには「T」で始まるアルファベットを付している。「T」のうち、「TG」を除く全員が元留学生である。また、こうした元留学生の多くは中国やベトナムといった母国からこのゼミに参加している。また、留学生の身分でありながら、日本国内に入ることができない大学院生も数名おり、オンラインゼミはそうした学生の指導を行う場としても機能している。国境を越えたゼミ参加が可能になったことは、オンライン・コミュニケーション時代の副産物と言える。

このようにゼミに参加する人数が多かったため、質疑応答が活発になるように1グループ7名前後の4グループに分けてブレイクアウトルームに入り、105分の授業時間のうち、休憩時間の5分を挟んで

前半50分と後半50分で発表者を交替して行う形態を取った。つまり、1回の授業にたいして4名の発表者がおり、各発表者は二つのグループで発表を行う。各参加者は2名の発表者の発表を聞くことができ、うち1名の発表は自分が聞くことを希望した発表になるように割り振ってある。発表時間は50分ということになっているが、議論が白熱することが多いため、60分前後で行われることが多かった。なお、指導教員である筆者は決まったグループに参加することはせず、必要に応じて各グループを移動してコメントを行っている。また、学術的な対話における司会役の重要性に鑑み(胡, 2018)、各グループには発表者が指名する司会者を置いている。こうしたゼミ運営の方法と理念については石黒(2021)に詳しく記したので参照されたい。

本論文で対象とした資料は、2020年4月23日、30日、5月7日、14日に行われた第2回から第5回のゼミナール(第1回はオリエンテーションのみ)の4グループのうち、2名の新生生が参加した2グループのゼミ談話について、参加者の許可を得たうえでZoomの録画機能を用いて録画し、それを文字化したものである。ゼミ中は原則ビデオをONにして顔出しすることを求めているので、音声が多量悪くても誰が話しているかは確認することが可能である。文字化は、宇佐美(2011)に従っている。

資料は、ゼミ主催者である筆者が教員の立場から、ゼミ参加者である留学生の博士課程大学院生が学生の立場からすべてに目を通し、オンライン・コミュニケーションにおいて参加者が相互に協力し、関わりを深めようとしていると一致して認定した発話のやりとりを分析対象とした。そのうち、ゼミ発表そのものに積極的に関与しようとしているやりとりと、ゼミ発表そのものではない周辺的内容に言及し社交を行っているやりとりに二分し、以下の3.と4.でそれぞれ分析を行う。分析のラベル付けは分析資料を見ながら筆者が行い、複数の例が見られたものは典型的な例を示した。こうした分析方法を取ることによって、オンライン・コミュニケーションにおいて参加者がどのように協働し、話し合いにおけるやりとりを活性化させているかを観察できると考える。

3. 話し合いにおける参加者の積極的関与

3.1 ターンの取り方

本節では、研究課題①「オンライン・コミュニケーションでは、話し合いにおける参加者の積極的関与が失われやすいのか。」について検討する。

すでに述べたように、オンライン・コミュニケーションでは、ターンを取るタイミングがわかりにくい。Web会議システムの場合、誰かが同時に話すようにはできておらず、誰か一人が話し手になると、残りの全員は自動的に聞き手になり、他者の発言に割って入り、話しだすタイミングを図るのが難しい(宮内・遠藤, 2020)。つまり、話し手と聞き手の境界が明確であり、「オンライン授業では、1人が発言しているときに他の人が発言できません」(拜田ほか, 2021: 174)と感じやすいのが、現行のWeb会議システムの特徴である。

その結果、一つの発話者がターンを譲らず長く話すかどうかは、オンライン・コミュニケーションと対面コミュニケーションの量的な比較によってしか明らかにしえず、本論文はその準備はない。ただ、これまで対面ゼミとオンラインゼミ双方の運営に携わったものとして、両者に大きな違いがあるようには感じられず、ゼミのグループのなかで一方的に長く話す傾向がある者は、対面であってもオンラインであっても長く話す傾向があるように見受けられる。とくに教師の場合、明らかに立場が異なるせいか、一旦話しはじめると、間にあいづちを挟ませずに長く話す傾向が見られたが、対等な立場にある学生同士の場合、比較的あいづちも多く見られた。「対面授業のメリットとしては、相手の目を見て話が出来て、相槌などの反応もしやすいところだ」(岡田, 2021: 31)と感じる向きもあるが、オンラインの場合、うなずきという非言語行動が画面越しに伝わりにくく、あいづちを積極的に口にすることでその伝わりにくい部分を補完しているように見受けられた。

次の(1)では、発表者であるIMの発話にたいし、JBが「うん。」「うん。」「うんうん。」「うん。」「はい。」「うん。」「うん。」「うんうんうん。」「うん。」「<笑い>。」とあいづちを重ねながら共感を持って聞いて

ている。IMは、他大学からこのゼミに参加している修士2年の中国人の発表者で、今回が初めての発表であり、緊張している。一方、JBは、このゼミに長く在籍している博士2年の日本人の学生で、緊張している後輩の話を親身になって聞いている様子が窺える。途中からJBが主導権を持って話すと、今度はIMが「んー。」「あーはいはいはい。」「うん、そうですね。」「はい。」と耳を傾けるようになり、そして、IMがJBの質問に答える番になると、またJBが「うん。」「うん。」「んー。」「んーんーんー。」「はい、[小声で] あ、そっか。」とIMの話をあいづちで受け止め、最後に両者が「あ、ありがとうございます。」と挨拶を交わすことで一連の話段（ザトラウスキー、1993; 佐久間、2006等）を最終させている。

(I) あいづちの多用

IM：あの、この一、最後の一、
JB：うん。
IM：“今後の計画”の一、ところーなんですけどー、
実は、去年の、あの、合宿のときは、あの、
先生、あの一、と一緒に一、あの一、この計
画を一、
JB：うん。
IM：あの一、んー、作って、あん、あげましたけ
どー、
JB：うんうん。
IM：あの、そのときはまだ接続詞、
JB：うん。
IM：接続詞の研究を一、あの一、やるつもりー、
JB：はい。
IM：なので一、あの、でも、あの一、パイロット
調査の作文の一、分析したらー、
JB：うん。
IM：あの、接続詞一、《少し間》あの一、接続詞、
じゃなくて、接続表現、まで一、広げていき
たい、
JB：うん。
IM：と一、も、と思うので一、あの一。
IM：でも、ここーは一、まだ、そのまま、
JB：うんうんうん。

IM：そ、んー、んー、《少し間》んー、たぶん、《少
し間》、んー、ハンドブック、は一、あの、接
続詞の一、あの、ハンドブックは作りやすい、
けどー、もし接続助詞、んー、と一、接続表現、
あの、範囲をひろ、げたらー‘広げたら’、
JB：うん。
IM：ん、《少し間》<少し笑いながら>難しくなる。
JB：<笑い>。
IM：<笑い>お、んー。
JB：ハンドブックって、どういうイメージ、にす
ればいんだろ。
JB：なんか、
IM：んー。
JB：接続詞の一覧が、あつて、とかつてイメージ
ですか?。
IM：あーはいはいはい。
JB：“しかし”、“また”、“さらに”、みたいなのが
あつて、
IM：うん、そうですね。
JB：説明があつて、みたいなイメージ。
IM：はい。
JB：《沈黙3秒》今までに出てるようなものだと、
足りない??ですか。
IM：んー、中国人ー、
JB：**。
IM：学習者ー、
JB：うん。
IM：を一、あの一、あの、ち、中国人学習者、の、
JB：うん。
IM：母語、干渉、からの影響も、
JB：んー。
IM：含めて一、あの、作りたい、
JB：んーんーんー。
IM：ですけど。
JB：はい、[小声で] あ、そっか。
JB：《沈黙7秒》あ、ありがとうございます。
IM：あ、ありがとうございます。

また、個々の参加者の非言語行動を把握することが難しいオンラインゼミにおいて、とくにオンライ

ンでのやりとりに慣れていない初期段階ではターンを取ることで自体に苦勞しているようではあった。しかし、誰もターンを取る参加者が現れない場合、発言が相対的に少ない参加者に意見を求めてターンを割り当てたりする一方、複数のターン取得候補者が現れた場合、適宜調整することによってターンを調整する姿が観察され、慣れない状況下であっても、参加者が協力してターンの受け渡しを行っていることが明らかになった。

(2)では、自分が話し終えたTGが、全体の発言のバランスを考えて、まだ発言のないIIに発言を割り当てる提案を行っている。発表者であるILがTGの提案に賛意を示し、指名されたIIもそれに同意している。そして、司会者のJCが「はい、お願いします。」という発言でIIにコメントを促している。

(2) ターンの割り当て

TG: どう、だろ、ちょっとIIさん話してないから。

IL: そうですね、IIさん、

II: あーはい。

JC: はい、お願いします。

(3)では、しばらく沈黙が続いたので、司会者であるTEがここまで発言のなかかったIKとIAの2人に発言を促している。発表者であるILもそれに同調している。その求めに応じてIAは話しだし、IKは挙手を行っている。司会者であるTEは挙手をしたIKに意識がいつてしまっていたが、IAが先に話しだしていたことがわかったため、IKの許可を取ってIAに発言のターンを委ねている。

(3) ターンの調整

TE: 《沈黙15秒》えー、IKさんとー、IAさんまだ<笑いながら>発言されてないんですがいかがでしょうか。

TE: はい、何‘なに’か、はい、感想でも、はーい、いいので、あの、

IL: はい、ぜひ、ぜひ。

TE: あれば、お願いします。

IA: 談話分析をしている人間です<笑い>。

TE: **は、はい、挙手し**。

TE: あ、IKさんお願いします。

IA: あ、や、あの一、ちょっと、じゃあ、

TE: 大丈夫ですか、大丈夫ですか。

IK: はい。

IA: 聞いてもいいですかー。

IL: はいはい。

(4)はターンの譲り合いの例である。司会者であるIAは、IMの発表にたいして質問者を募っている。沈黙が続いた場合、司会者自身が質問をして場を持たせることが少なくないが、他大学から来ているIAはそれをせず、やはり他大学から来ているIMと同じ研究室所属であることを強調し、このゼミを本属としている参加者に質問を求めている。その求めに応じて、JBとTFが挙手した。まずは挙手するときに声を上げたJBにターンが渡りかけたが、IMと専門が近く、自分が質問すると長くなるので最初に質問するのは控えると直前に言っていたJBはTFにターンを譲った。しかし、TFもターンを譲ったため、譲り合いが生じている。IAが少し笑いながら「譲り合ってる?」と言ったことにより、TFが当初のJBの考えを尊重し、先に質問することに決め、質問を開始している。オンライン・コミュニケーションの場合、雰囲気というのが伝わりづらいので、このように言葉に出してターンを決めることが多い。

(4) ターンの譲り合い

IA: **皆さんどうでしょうか。

IA: どなたか、挙手。

IA: 《沈黙12秒》私は実はIMさんと、同じ研究室なので一、あの一、いくらでも一、この後‘あと’、<笑いながら>いくらでも、アドバイスできるので一、皆さんからぜひ<笑い>。

JB: あ、あー、そしたら。

IA: はい。

JB: あ、手を、手を挙げて<笑い>。

IA: あつと一。

IA: じゃ、まず、JB、あ、TFさんも手を挙げたんですけど、どうでしょう。

IA：どうでしょうか。

JB：TFさん、できる？。

IA：TFさんから？<笑い>。

TF：じゃ、JBさんお先にどうぞ。

IA：<笑い>。

IA：譲り合ってる？<少し笑い>。

TF：と…。

TF：じゃあ、私は聞かせてください。

IA：[小声で] お願いします。

3.2 沈黙回避行動

オンライン・コミュニケーションでは発言者が発言を控えがちになり、沈黙が訪れやすい。なぜなら、オンライン・コミュニケーションでは誰かが話していれば自分が話さなくても済む状況が生じやすく、参加者の当事者意識が薄れ、傍聴者になってしまいがちだからである。岡田(2021)はこうした傍聴者になる参加者を「フリーライダー」と呼ぶ。しかし、今回のように顔出しが行われている少人数のゼミでは「フリーライダー」は現れにくいようである。

もちろん今回のゼミ談話でも沈黙は存在していたが、短い沈黙しかないグループと長い沈黙が何度か起きてしまっていたグループに分かれていた。後者について見ると、比較的おとなしい人がそろっているという要因や、初見の発表なので理解が追いつかない要因などがあり、オンライン・コミュニケーションだから長い沈黙が続くわけではなさそうである。しかし、オンライン・コミュニケーションの場合、「シーンと静まり返ったときに誰が声を発すればいいのか」と難しい空気になる」(岡田, 2021: 33)という指摘に見られるように、それぞれの参加者は自分一人の場所で長い沈黙に耐えなければならず、その沈黙が対面コミュニケーションよりも重く感じられるというのが実態に近いのではないだろうか。

その沈黙をとくに重く感じるのは司会者と発表者である。司会者は質疑応答を管理する立場にあるので、質問が出ないと責任を感じ、(3)や(4)のIAのように、質問が出るよう参加者にたいして積極的に働きかけたり、自分でまずは質問を行ったりする。また、発表者も質問が出ない状況は、自分の発表がわかりにくかつ

たのではないか、あるいは参加者の興味を惹くに値しないつまらないものだったのではないかなどの不安にさいなまれ、自ら参加者に質問を求めることもある。

(5)は、司会者が自ら質問を行う例である。司会者自らが行う質問は、発表の前提となる概念にたいする説明を求めるものが多い。参加者でその前提を共有することでその後の質疑応答を行いやすくするとともに、参加者が具体的な質問を準備するための時間稼ぎをする効果を狙っているとみられる。このため、司会者の質問は単なる質問で終わり、ゼミ発表で多く見られる質問からコメントへという発展を見せないことが多い。むしろ、司会者としての役割を逸脱し、コメントをしてしまうことで参加者のコメント行動を奪ってしまうことを恐れ、単なる質問で留めるように工夫しているように感じられる。

(5) 前提共有の質問

IK：他‘ほか’に、あります、でしょうか。

IK：《沈黙9秒》あ、じゃあ、皆さん、考えてるうちに、*しき、少し、質問してもよろしいですか。

JG：はい、お願いします。

IK：あの、少しお聞きしたいのが一、と、文章タイプ、の中で一、

JG：はい。

IK：たとえば、この、“社員から会社”、《少し間》っていうところに一、ま、会議報告書??、と日報、っていうふうに書いてあるんですが、

JG：ええ。

IK：と一、あつと‘後’には会議報告書一だけ一、こう。

JG：あ一、あ、そうですね、はい。

IK：どういう、ことですか。

{中略：JGによる質問への回答が続く}

JG：ことですね。

IK：はい、ありがとうございます。

IK：それでは他‘ほか’に一、ご意見など [小声で] ございますか。

IK：[TBさんが挙手しているのを見て] はい、お願いします。

一方、(6)では、ゼミで初めて発表をしたILが質問のない状況に不安を覚えている様子が示されている。ILは日本に留学した経験がなく、今回初めて日本に来るはずであったが、コロナ禍の影響で渡日できなかった。また、Zoomによるオンライン・コミュニケーションにも慣れておらず、中国国内の接続も芳しくない状況で不安を覚えている様子が言葉に表れている。それにたいし、司会者を務めるこのゼミに慣れたTEがなだめ、場を落ち着かせている。

(6) 沈黙への不安表明

IL：はい、どうぞ皆さんアドバイスを、していただけと幸いなんですけど。

IL：今、すごく不安な状態にいて。

IL：《沈黙7秒》皆さんに聞こえていますか？。

TE：聞こえています。

TE：大丈夫です。

TE：ご安心ください。

TE：《沈黙10秒》たぶん皆さんもはじめで‘初めて’あのILさんのご発表に、ご発表をお聞きになると思いますので。

IL：はいはい、すいません。

TE：うん。

IL：やっぱり皆さんは談話研究とかの、研究をしている方‘かた’が多くて、私みたいの<笑い>、その、授業研究をしている、ほうが少ないと思いますし。

通信状況が不安定になりがちなオンライン・コミュニケーションでは、沈黙は接続の不良を解釈されるおそれもあるため、沈黙を回避するさまざまな行動が見られる。(7)では、発表者であるJCが、資料共有のための自らの準備作業によって沈黙が続くのを回避するために、自己の準備作業を実況する形で沈黙が起こらないようにしている。実況する部分は敬体を避け、常体を用いるスタイルシフトを行っている。

(7) 準備作業の実況

JC：あ、では、えっと、画面、を。

JC：[小声で] ちょっと待ってください。

JC：あ、じゃ、画面を共有して、え、お話ししたいと思います。

JC：[画面を操作しながら独り言] ****してー、はい、《少し間》これかな。

JC：《沈黙5秒》はい、とー、これは。

JC：[小声で] よいしょ。

JC：《沈黙4秒》はい、[小声で] よいっしょ。

JC：《少し間》あの、あ、これじゃない、あ、すいません。

JC：こっちじゃなかった、こっちですね。

JC：少々お待ちください。

JC：[画面を操作しながら独り言] え、そして、えっと《沈黙5秒》こっちな。

JC：《沈黙3秒》はい、えーとー。

JC：はい、こあ、これが、あの、先ほど先生に差し替えていただいたものです。

オンライン・コミュニケーションでは、通信状況の不調による沈黙や、ミュートを外し忘れての沈黙などが起きうる。(8)はミュートを外し忘れた例であるが、そうした自分の行動にあえて言及することで、長く続いてしまった沈黙はけっしてコメントがなかったわけではないということを示し、沈黙が招いてしまった負の影響を最小限に留めようとする姿勢が見られる。また、オンライン・コミュニケーションでは、沈黙の理由が伝わりにくいが、コメントを検討中である、コメントに関わる資料を検索中であるなどと沈黙の理由を言語化して、沈黙における参加者間の関係の維持・修復に努める傾向が見られた。

(8) 沈黙理由の表明

JA：《沈黙22秒》すいませーん。

TE：はい。

JA：あの、さっき、

TE：あ、そ…。

JA：手を挙げ、挙げたのに、マイクが入ってなくて<少し笑いながら>全然、

TE：<笑い>。

JA：画面に向かって、む、無駄に話しかけちゃってました。

JA：失礼しました。

4. 参加者間の社交

4.1 共有された仮想空間への言及

ここからは、研究課題②「オンライン・コミュニケーションでは、話し合いにおける参加者間の社交は起こりにくいのか」の検討に移る。

コミュニケーションにおける伝達には、情報の伝達と感情の伝達があり、コミュニケーション環境の二重性を持つオンライン・コミュニケーションでは、現実世界を共有していないため、非言語行動に依存しない情報の伝達に集中し、話し合い自体は効率的に進む一方で、感情の伝達が抑制されてしまう。また、現実世界を共有していないため、そこから自然に発生する雑談のような社交的発話が起こりにくくなる弊害がある。その結果、「ディスカッションをする前提で仮想会議室に入ると、与えられた課題に集中したコミュニケーションは行われるが、スモールトークは行われにくい。{中略} 他者とともに学ぶ前提である信頼をベースとした対人関係の構築が簡単ではない」（赤崎，2021: 115）という状況に陥りがちである。

しかし、今回の分析の結果からは、そうした印象は感じられなかった。たしかに参加者同士で現実世界を共有しているわけではないが、ディスプレイに映しだされる仮想世界もまた参加者同士で共有されている一つの世界であり、そこには豊かな情報が存在し、ところどころに現実世界が顔を見せている。参加者はそうした情報を巧みに用いてコミュニケーションを行っており、現実世界を共有する一体感と同じような一体感を仮想世界でも作りだすように注力している様子が観察された。その背景には、赤崎(2021)が指摘する顔出しの効果があるとみられる。

実際、Zoomの画面には、話し合いのテーマからすると周辺的に見えるさまざまな情報が映っており、それをもとに参加者同士で社交のやりとりを行うことが可能である。たとえば、ビデオをONにしていると、参加者の一人ひとりの顔がタイルのように並んで映しだされる。相手の顔も参加者自身の顔も真正面から見るができるのがWeb会議シス

テムの特徴であり、画面に映る互いの顔をめぐって会話を交わすことが可能になる。(9)はその例であり、JEの髪型が変わったことが話題となっている。

(9) ビデオの人物への言及

JE：じゃ、じゃ発表お願いします。

JC：はい、あ、髪を切られたんですね。

JE：そうです<笑い>。

JE：ありがとうございます。

もちろん、ビデオには参加者の顔だけでなく、背景も映っている。実際の部屋が映っていることもあるし、仮想背景を自分で設定することもできる。そうしたものが参加者の共通の話題となることもある。また、ビデオの便利なところは参加者の顔と一緒に名前が表示される点にある。とくに初めて会う相手には、この名前が有力な手がかりとなる。(10)はILの名前の読み方をめぐって会話が交わされた例である。それを皮切りに新参加者であるILの自己紹介が自然と行われ、互いが深く知り合うきっかけとなっている。

(10) ビデオの名前への言及

IM：《沈黙2秒》んと一、あの一、名前、あの一、あの一、名字は、あの一、どう読めばいいんですか。

IM：あの一、ほん。

IL：私、IL、と言います。

IM：あ。

JB：あ、ILさんって読むんですね。

IM：IL、あ、ILさん、はい。

IM：あの一、ILさんも一【。

JB：】この字、“〇”って読むんですね。

IL：うん、そうです。

JB：はいはい。

IM：ILさんもM2一ですか？。

IL：そうです。

IL：私は、その、留学生はなく一、中国国内の大学の、

IM：あ一。

IL：M2。

IM：ほほほー、なるほど、んー。
 IA：《少し間》その大学はー、M3??《少し間》まで?。
 IM：あー。
 IA：3年、《少し間》3年コースでしたっけ?。
 IL：3年コースです。
 IA：**やって、,
 IM：あ。
 IA：まだまだ、,
 IL：はい。
 IA：余裕が、ありますよ<笑い>。
 IM：<笑い>。
 IL：1年目ーは全然、その、研究のことが考えられなくて、もう、全部基礎の授業で埋まって、その、2年間に、入って、やっと、その、自分の、研究に集中できるという状態。
 IL：あ、皆さんのほうが、一歩進んでますよ。
 IL：大丈夫です。
 IL：私が<笑い>、下敷きになってます。
 IA：いやいやいや。
 IA：そこまだ、スタート、まだ、始まったばかりですよ<笑い>。

Web会議ツールのビデオはそのほかいろいろな情報を届けてくれる。たとえば、いきなり同居の子どもが走り回っている姿が映りこむことがある。それによって、緊張感のあるやりとりが和らぎ、リラックスした雰囲気になることがある。

また、音声のミュートを解除していると、参加者の生活環境における自然な音声が流れこんでくる。電話がかかってきたり、宅配便が届いたり、近くの道路を救急車が行き来したりする様子が伝わってくる。次の(11)は、コメントをしているTBが夕食の支度をしており、その生活音が入ってきた例である。これによって、緊張していた場が少し和んで、参加者がリラックスしている様子が窺える。

(11) 生活音への言及

TB：その評価っていうのは、毎回??、のー、その先生が出してくれたものを、コメントす、して、返して、次また、べ、別のテーマかもし

れないけど、それでまた、あの、先生が評価して、で、本人がそれを見て [炊飯器の電子音が聞こえる]。

II：<笑いながら>炊飯器ですか。
 TG：ご飯が炊けた。
 TB：<笑い>で、本人が、それを見て、,
 TG：ちょっと、**ちょっとびっくりしたよ。
 II：<笑い>。

(12)は、ブレイクアウトルームに流れてくるホストからのメッセージを参加者が読みあげているものである。チャットとは異なり、流れてくるメッセージはすぐに消えてしまうので、声に出して参加者同士で確認していたと思われる。そのなかの参加者のTGが「飲み物を取りに行ったり」を「飲み会をしたり」と読み誤り、「ビールを取りにいかないといけないのかな」とボケて見せている。周囲もそれが冗談だと知りつつ同調し、笑いとともに楽しい雰囲気作りがなされている様子が観察できる。

(12) メッセージの読み上げ

II：え。
 II：[おそらく画面上に表示された文字を読みながら] “6時20分に再開します”。
 TB：“再開します、それでゆっくり”。
 TG：“ゆっくりしてください”。
 TG：“前半後半同じです”。
 TG：あー。
 TB：あ、“発表者だけ”。
 II：“発表者だけいれか…”。
 II：あー。
 TB：あー、あー、なるほど。
 II：ですか。
 TG：今“飲み物を取りに行ったり”が“飲み会をしたり”って僕一読み間違えてちょっとびっくりしたけど、,
 TB：<笑い>。
 TG：ビールを取りにいかないといけないのかなと。
 TB：私も<笑い>。
 TB：なんか、予測しちゃってそのまま飲み会と

かって思って。

II：<笑い>。

TG：のみ、わか、なんか、あれこの後‘あと’飲み会じゃないの?、とか思っちゃった<笑い>。

TB：<笑い>。

IL：オンライン飲み会じゃない。

JC：ごめんね。

JE：<笑い>。

TB：*く飲みたい。

オンライン・コミュニケーションはあくまでインターネット環境を利用して互いにつながっているため、接続が悪くなってしまうと参加者が突然消えてしまうことがある。また、接続が悪くなったとたん、ビデオが静止画像になったり、ビデオ画面が黒くなってしまったりすることもあるが、しばらくすると自然と復旧することがある。そうした状況にたいし、(13)のように参加者が心配になって言及することもしばしば起きる。

(13) 消える参加者への言及

TG：[ILさんが画面上から消える] あれ?、消えた。

TB：<笑い>。

II：え、え。

IL：**いる?。

TB：いる、いますね、います。

一方で、一度画面から消えた参加者が再度接続して突然現れたり、ホストがブレイクアウトルーム内の参加者を入れ替えたりすることで参加者が現れることもある。(14)では、他のグループでの発表が終わり、このグループでこれから発表するためにホストから移された次の発表者が画面に現れている。これは、今の発表者の発表時間がすでに過ぎており、早めにその発表を終わらせて次のグループに移るよというホストの暗黙の指示であり、そのことを参加者たちが理解し、発表を終息に向かわせていることがわかるやりとりである。

(14) 現れる参加者への言及

II：[次の発表者が画面上に現れる] あ、次の発表者。

IL：はい、しゃ、はいはい。

TG：そろそろ終わりだね、これ。

TG：おつかれ、おつかれさまでしたー。

IL：はい、すみません、ありがとうございますましたー。

雑談が少なく、テーマに沿った内容だけが話されやすいとされるオンライン・コミュニケーションであるが、参加者のビデオ画面を見ているかぎり、次々にハプニングが起こっており、コミュニケーション環境の二重性も相まって、じつに豊かな現実を取りこんでいることがわかる。雑談が少ないということはかならずしもなく、仮想空間のリソースを用いて参加者間での交流が盛んに行われている様子が看取できる。

4.2 共同作業による助け合い

コンピュータが苦手なものにとって、慣れないZoomの操作は難しいものである。オンライン会議ツールが本格的に使われだした2020年度当初の段階においては、さまざまな初歩的な操作ミスが生じていた。しかし、そうした状況においても他の参加者の指摘やアドバイスによって徐々になじんでいく様子が観察された。たとえば、次の(15)はミュートが解除されておらず、それを指摘したものである。こうした初歩的な操作ミスは当時に限らず、今でもよく見受けられるもので、「ミュート外すのを忘れて発言してもどかしい思いをしたり」(拝田ほか、2021: 172)することは少なくない。こうしたオンライン会議ツールの一連の操作は、他者の視点からでないモニターしにくい性格を持っていることに由来していると思われる。しかし、そうした他者からの指摘によって自然と発言が生まれ、相手の発話にきちんと耳を傾けているというシグナルにもなっている。

(15) ミュート解除の指摘

TG：《沈黙2秒》TBさん、ミュート、ミュート。

JC：ミュートになってるみたい。

TG: TBさんミュートになってる、《少し間》音声。
TB: すいません、はい。

上の(15)のようなミュート解除の指摘は、発表者自身がすぐに対応できるものであるが、次の(16)のような画面共有は、他の参加者の目から確認が必要なものである。そのため、画面共有の確認作業は画面越しの参加者の共同作業となる。(16)の画面共有はなかなかうまくいかず、やりとりはかなり長く続いているが、最終的には共有画面が参加者全員に共有され、共同作業による達成感と一体感が得られる結果となっている。

(16) 画面共有の確認

JC: それから、えっと 【。
TB: 】 JCさん、すいません。
JC: はい。
TB: えっと、共有して下さった一、あの、画面が動いてないんですけど。
JC: あ一、はい、ごめんなさい。
JC: あ、それで 【。
TB: 】 動かしながらですかね。
JC: はい、えーっと、じゃ、私の間違ったのを共有したかもしれない。
JC: これ、どうでしょうか。
JC: [画面に資料が表示される] これ、共有されますか?。
JC: 動いていますか?。
TB: えーと、きよ、共有、あ、見えてるんですけど、動いてはいけません。
JC: 動いてない。
TB: はい。
JC: はい、じゃ、ちょっと待ってください。
JC: えーっと。
TB: 《少し間》もし動かしながら、,
JC: はい。
TB: あの、見せてくださると**、,
JC: あ一、はいはい、これで。
TB: ここは動いてなかったです。
JC: は一い、わかりました。

JC: 動かしながらやってたつもりです。
JC: ちょっとお待ちください、はい。
JC: [独り言] えっと、画面を共有でしょ、これ、で、共有。
JC: これでどうでしょうか [画面に再度資料が表示される]。
JC: 動きますか?。
JC: 動きませんか?。
JC: 《沈黙3秒》 これでどうでしょうか。
TF: ちょっと操作しながら、,
JC: はい。
TF: やってみていただければ。
JC: はい、今これ動かしてるんです。
TF: 今、み、あ、動いてないです。
JC: 動いてない。
JC: おや。
TF: はい。
JC: 《沈黙2秒》 じゃ、これを共有を停止して一、じゃあ、ちょっと待ってくださいね。
JG: えーと、あ、じゃちょっと、あの、画面共有をちょっとやってみますんで、見えるかどうか、念のため。
TB: 《沈黙6秒》 あ、見えそう。
JG: 《少し間》 これ見えま、これは、見えますか?。
TB: はい、**きました一が、まだ、《少し間》 出そうですけど一、まだ、黒い、画面ですね。
IK: はい。
JG: あ一。
JE: あ、ほんとです。
JG: えーっと、たぶん私のパソコンの 【。
IL: 】 見えました。
JE: **。
TB: あ、出ました。
JG: 今は一、ひょう、標準になって、あ、これ、今、スライド、にしたんですけど。
TB: あ、はい、出てます。

画面共有の例をもう一つ示しておく。次の(17)は画面共有をJBが初体験したときの様子である。JBは画面共有機能を使ったことがなかったが、IAに

「どうでしょ、もうちょっと画面共有、とか」「で一、したほうがいいん、ですかね」と促されたのにたいし、JBは「あ、そ、あ、《少し間》実は私画面共有の仕方がわからなくてですね<笑い>」「どうやってやる<笑い>」と返したものの、IAにやり方を教わりながら恐る恐る画面共有に挑戦している。すぐには共有画面が現れなかったものの、やや時間をおいて表示され、共有画面に基づいて説明を行う環境が整った。そして、説明を終えて共有を外す段になって、JBは再び戸惑ったものの、無事に共有画面を閉じることができ、「わー、初めて共有できたー<笑い>」と素直に喜びを表明し、それをサポートしたIAも笑いながら「感動<笑い>。」と述べている。

このようにして互いに助け合いながら、オンライン・コミュニケーションに必要なスキルを身につけていくだけでなく、その過程で喜びの感情を共有し、互いの信頼関係を高めており、これはオンラインならではの現象と見ることができる。

(17) 画面共有の共同作業

IA：えーと、あ、今ちょっと、コーパスを検索していて、**** 【。

JB：】 あ、そ、そ、あの今検索一、したんですけど一、タイトル言ってもいいですか?、あ、タイトルと**。

JB：JCK、JCK 作文コーパス、の中の、意見文のテーマが、《少し間》“晩婚化とその展望について《沈黙3秒》意見と根拠を述べなさい”、っていうテーマ、です。

IA：どうでしょ、もうちょっと画面共有、とか、

JB：ちょっと似てるよね。

IM：あー。

IA：でー、したほうがいいん、ですかね。

IA：画面共有?。

JB：あ、そ、あ、《少し間》実は私画面共有の仕方がわからなくてですね<笑い>。

JB：どうやってやる<笑い>。

IA：あれ?、下に、画面共有の、ボタン、緑のボタンが、ありますよね。

JB：んーと。

IA：<笑い>。

JB：あ、これか。

IA：うん、《少し間》え。

JB：やってみていいですか?。

IA：はい。

JB：<笑い>。

IA：<笑い>よし。

JB：これは、どうなってますか?。

IA：えーと。

JB：どうなってますか<笑い>。

IA：今、まだ表示されていないんですけど、たぶん、

JB：あ、<笑いながら>共有されてない?。

IA：*。

JB：<笑いながら>してるつもりだったのに。

IA：開始しましたっていう。

JB：《少し間》今共有、できてますか?。

IA：あ、今、はい。

IM：はい。

JB：《少し間》[表示された画面をポインターで指しながら] これ、えっと、JCK 作文コーパスで検索したときのトップ画面です。

JB：で、説明が書いてあって一、えと、“作文課題の種類”っていうのがあって、

IM：はい。

JB：説明文と意見文と歴史文。

IM：《少し間》はい。

JB：で、それぞれのテーマが、ここに、《少し間》書いてあります。

IM：あー。

JB：説明文は“自分の、故郷について”??。

JB：意見文は、“晩婚化の原因とその展望について”。

JB：歴史文は、“自分一の趣味について”??。

JB：で、2000字ずつ。

IM：《少し間》はい。

JB：で、20人ずつですね、に、日‘にち’、日中韓。

IM：あー、はい。

JB：《沈黙3秒》こういうのが、《少し間》あります。

IM：あー。

IM：にけんぶん‘意見文’は一、
 JB：意見、ん。
 IM：ん一、そうですね、似てます<少し笑い>。
 JB：似てますよね。
 IM：はい。
 IA：ん一。
 JB：だからあれかも。
 JB：その一、《少し間》今、えと一、IMさんが考
 えてる小論文っていうのが、こういう意見文
 と同じなのかどうか、ていうことと。
 JB：あ、あ、あ、さっきILさんもおっしゃってま
 したけど。
 IM：はい。
 JB：もし違うんだとしたら一、自分の考えてる小
 論文、がどういふものなのかってたしかに考
 えたほうがいいのかも…。
 IM：ん一はい。
 JB：[音声途切れ途切れになる]****ながら、**。
 JB：これは、共有、切るのはどうすればいい<笑
 い>。
 IA：切るのは、
 JB：ん一**。
 IA：んと、きよ。
 IA：[共有画面が切れて]はい。
 JB：わ一、初めて共有できた一<笑い>。
 IA：<笑い>感動<笑い>。

オンライン会議ツールを使用する場合、とくにワ
 イヤレス環境でインターネットに接続している場
 合、音声の不調は避けて通ることはできない。とく
 にこのゼミの場合、海外からの参加者が多いため、
 音声途切れることが少なくなかった。

音声途切れるのは望ましいことではないが、次
 の(18)のように、音声途切れた前後の発話を参加
 者一同で確認することになるため、他の発言者が発
 言しているときに集中力が散漫になりがちなゼミに
 あっては、そうした協力作業が相互の理解を深める
 きっかけになる。もちろん、あまりにもぶつぶつ途
 切れてしまうと、聞いている側の負担は大きいが、
 音声の聞き取りにくさを理由にして自分が聞き取れ

なかつた部分を聞き返すことが比較的容易になるた
 め、一つの聞き取りのストラテジーとして使われる
 様子も観察された。

(18) 途切れた音声の修復

TF：あの一、えと一、学習者の、そうろんぶん
 ‘小論文’を書くとき、かなり一、母語、あ、
 母語の影響があると思いますけど一、
 IM：はい。
 TF：これから、あの一、母語のデータ??、中国一
 人‘中国人’の、う、あ、母語話者、[音声切
 れる]ますか?。
 IM：《少し間》え?、あ、聞こえません、すいま
 せん<少し笑い>。
 IA：途中、音声途切れちゃって【】。
 JB：【】母語話者まで聞こえました、<笑い>私。
 TF：取れたら一、母語話者のデータ??、
 IM：はい。
 TF：あの一、取る予定がありますか?。
 IM：《少し間》と、はい、そうですね、はい。

本節では話し合いにおける参加者間の社交が起
 りにくいのかについて論じてきた。最後に笑いの効
 用について考えたい。社交が適切に行われている話
 し合いには笑いがあることが多い。宮内・遠藤(2020)
 のようにオンライン会議では対面の会議よりも笑顔
 が少なくなるという指摘もあるが、今回のゼミ談話
 のデータには多くの朗らかな笑いが見られた。

たとえば、(19)の例はこのゼミで初めて発表する
 IMが、司会者であるIAの「逆にIMさん、今一番
 なんか、困ってる、ところとか、《少し間》もし、
 《少し間》聞きたいこと、,、」[小声で] あれば」という
 問いかけにたいし、少考して「《少し間》たくさん
 困ってます」と答え、参加者全員の笑いを誘って
 いる。研究という営みを進めるうえで困難な課題を
 たくさん抱えるのは、大学院生共通の悩みであり、
 IMの言葉はそれをうまく言い当てているからであ
 る。この笑いによってグループ内の気持ちの共有が
 適切に図られ、建設的な話し合いに欠かせない信頼
 関係の醸成につながっていると思われる。

(19) 笑顔による助け合い

IA：まあ、んー?、《少し間》まだ時間が、ありますが<笑い>、逆にIMさん、今一番なんか、困ってる、ところとか、《少し間》もし、《少し間》聞きたいこと、

IM：んー。

IA：[小声で] あれば。

IM：《少し間》たくさん困ってます。

IA：<笑い>ですよ。

JB：<笑い>。

IJ：<笑い>。

IL：<笑い>。

IA：んー。

IL：大丈夫ですよ。

IL：私も、同じ、ぐらい<笑い>ですよ。

IL：段取りもほとんど同じです。

IM：あー。

IL：大丈夫です。

IL：安心してください。

IL：大丈夫****ますよ。

IA：<笑い>。

IM：ありがとうございます。

4. おわりに

以上の検討を研究課題ごとにまとめると、研究課題①については、話し手と聞き手の境界が明確で、話者交替が起きにくいとされるオンラインゼミでも、ターンの割り当て、調整、譲り合いなど、参加者同士が協力することで話者交替を積極的に進め、参加者が積極的に話し合いに関与している様子が観察された。また、オンライン・コミュニケーションではとりわけ沈黙が重く感じられるが、司会者がつなぐ質問を行ったり、発表者自身がコメントを求めたりするなどして沈黙を回避するような行動が見られた一方、沈黙が生じている理由が消極的なものでないことを言語化することで、沈黙における参加者間の関係の維持・修復に努める傾向が見られた。

研究課題②については、参加者が存在している現実世界と参加者が話し合っている仮想世界が異なるオンライン・コミュニケーションでは、現実世界に

言及する雑談などの社交が行われにくいとされるが、実際にはオンライン会議ツールに参加者の多様な現実が反映されており、参加者はそれに言及することによって社交を行う様子が窺われた。また、オンライン・コミュニケーションでは接続トラブルがつきものであるが、そうした接続トラブルを参加者同士で助け合いながら解決したり、研究上の悩みを同じ境遇にある者同士笑いで共有したりするなどして協力し、信頼関係を醸成する姿が観察された。

上原(2021)は、自らの考察に基づき、オンライン授業の問題点を、(1) 部屋に他の人(非当事者)がいると、特定の人とのコミュニケーションができない、(2) 学生が教師やクラス全体に話しかけることが難しい、(3) コミュニケーションの当事者や話題が広がりづらい、(4) 教師中心のコミュニケーションになりやすい、(5) 学生同士の雑談、交流、助け合い、コミュニティ形成が難しい、の五つにまとめている。

また、上原(2021)では、その問題の解決法として、(1)「当事者」になりやすい環境を作る(ブレイクアウトルームの積極的な活用、全員のミュートの一時的な解除、学生自身による部屋のコミュニケーションのコントロール)、(2)文字によるコミュニケーションを活用する(Zoomのプライベートチャットの活用、SNSの利用、Google documentなどの共有・協働)という2種6点を挙げている。

今回の調査では、上記の解決法の(1)「当事者」になりやすい環境を満たすようにオンライン授業が設計されていれば、参加者は協力しあって、オンライン授業の五つの問題点を自律的に解消できることがわかった。適切なコミュニケーションの環境が整えられていれば、参加者は互いに働きかけながら、その場の状況に応じてやりとりの方法を変えていくことができ、人間の持つ高い可塑性が豊かなコミュニケーションを生み出すことが明らかになったと言える。もちろんその背景には、ゼミは、温かい雰囲気の中、参加者の建設的な対話によって発表者の研究発表を改善していく場であるという、石黒(2021)に示された当該ゼミの運営理念を参加者一人ひとりが理解していたことがあるだろう。参加者がその場で自分が何をすべきか、その目的さえわかっている

れば、問題解決の方法は自ら見つけだせるのである。

心理的安全性が保障され、信頼関係が醸成されたコミュニティでは、人は人とつながろうという気持ちを持ち、可塑性という人間の持つ最大の特徴を生かして、オンラインという慣れない状況下でも豊かなコミュニケーション活動が展開できる。大事なことは参加者のラポール形成である。

オンライン・コミュニケーションの形は一通りではない。グループの人数は何人ぐらいが適正か、グループの構成のバラエティはどうするか、話し合いの進め方はどうするか、司会者を設けるのが適切か、顔出しを求めるか否かなど、授業の設計の仕方によって、話し合いの質はかなり変わってくる(石黒編, 2018)。今後もオンライン・コミュニケーションをめぐる多様な研究が進められるなかで、参加者のラポールの醸成につながるコミュニケーション・デザインが洗練されていくことを期待したい。

謝 辞

本調査にご協力くださったゼミ参加者各位に感謝申し上げます。本研究は、国立国語研究所機関型基幹研究プロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」、JSPS 科研費22K00655の成果である。

注

- 1) もちろん、分野が違えばアプローチも異なる。心理研究者であれば、たとえば田村(2021)のような心理学的アプローチから、社会研究者であれば、たとえば藤田(2021)のような社会的アプローチから、それぞれ明らかにする必要がある。

【参考文献】

赤崎美砂 (2021). オンライン授業の課題と可能性—異文化コミュニケーションの視点から—, 異文化コミュニケーション論集, 19, 109-119.

藤田里実 (2021). 2020年のオンライン授業は大学教員と学生に何をもたらしたのか? 「活動システム」理論から考えるこれからの大学教育の課題, 関西大学高等教育研究, 12, 63-70.

拝田清・吉野康子・山崎千春・鹿住尚子 (2021). Web会議システム(Zoom)を利用した同時双方向遠隔教育の試験的実践, 和洋女子大学紀要, 62, 167-177.

石黒圭 (2020). リモートワークの日本語 最新オンライン仕事術, 小学館新書.

石黒圭 (2021). 文系研究者になる「研究する人生」を歩

むためのガイドブック, 研究社.

石黒圭(編) (2018). どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学, ココ出版.

加納寛子 (2020). コロナ禍における高等教育でのオンライン授業の可能性について 学生のオンライン授業のための通信環境とICT機器の所有状況に関する調査より, 日本科学教育学会年会論文集, 44, 521-524.

胡方方 (2018). 日本語上級学習者のピア・リーディング談話の多角的分析 発話機能と司会役の役割を中心に, 一橋大学博士論文.

徐煉 (2021). 大学院のゼミ談話における質疑応答の特徴の分析 発話カテゴリーと発話機能の設定に向けて, 一橋日本語教育研究, 9, 61-76.

松河秀哉・山内保典・佐藤智子・中川学・縣拓充・中村教博・串本剛・杉本和弘・渡邊文枝 (2021). オンライン授業の現状と学生の評価 基礎ゼミ受講者へのアンケート結果を中心に, 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 7, 3-21.

嶺川由季 (2001). 大学院のゼミ談話に見られる日本語母語話者の「対話」と「共話」の使い分け, 社会言語科学, 3(2), 39-51.

宮内佑実・遠藤正之 (2020). オンライン会議とオフライン会議の意思疎通の比較, 一般社団法人経営情報学会2020年全国研究発表大会, 144-147.

岡田佳子 (2021). 学生からみたオンライン授業のメリットとデメリット オンライン環境下のアクティブラーニングに焦点を当てて, 長崎大学教育開発推進機構紀要, 11, 25-41.

佐久間まゆみ (2006). 文章・談話の分析単位, 月刊言語, 35(10), 65-73.

田村美恵 (2021). ライブ型オンライン授業におけるアクティブ・ラーニングの効果について ディスカッション不安の個人差との関連で, 神戸外大論叢, 73(1), 29-49.

上原由美子 (2021). オンライン授業におけるコミュニケーション環境 活動中心の初級日本語授業の実践より オンラインによるインターアクション日本語教育の可能性, 神田外語大学留学生別科, 11-25.

宇佐美まゆみ (2011). 改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作 (2003~2006年度科学研究費補助金基盤研究B(2)研究成果報告書), 1-20.

ザトラウスキー・ポリー (1993). 日本語の談話の構造分析 勧誘のストラテジーの考察, くろしお出版.

(2021年10月5日受付)
(2022年2月17日修正版受付)
(2022年3月3日掲載決定)